



アマチュアオーケストラ

新交響楽団第147回演奏会

The New Symphony Orchestra The 147th Concert

モーツァルト | 交響曲第31番「パリ」

Wolfgang Amadeus MOZART (1756-91): Symphony No.31 in D major "Paris" K.297, 1778

マーラー | 交響曲第7番

Gustav MAHLER (1860-1911): Symphony No.7 in e minor, 1905

指揮: 小泉 和裕

KOIZUMI Kazuhiro, conductor

1995年4月30日(日) 2:00pm.

東京芸術劇場 (池袋駅西口)

Sunday, April 30, 1995 at Tokyo Geijutsu Gekijo (Ikebukuro Sta. West Exit)

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第147回演奏会

The New Symphony Orchestra The 147th Concert



指揮：小泉 和裕

KOIZUMI Kazuhiro, conductor

モーツァルト：交響曲第31番 ニ長調「パリ」 K.297(300a)

Wolfgang Amadeus MOZART: Symphony No.31 in D major “Paris” K.297 (300a), 1778

第1楽章 *Allegro assai*

第2楽章 *Andante*

第3楽章 *Allegro*

——— 休 憩 ———

マーラー：交響曲第7番 ホ短調

Gustav MAHLER: Symphony No.7 in e minor, 1905

第1楽章 *Langsam — Allegro*

第2楽章 *Nachtmusik I*

第3楽章 *Scherzo*

第4楽章 *Nachtmusik II*

第5楽章 *Rondo — Finale*

1995年4月30日(日) 2:00p.m.

東京芸術劇場大ホール

Sunday, April 30, 1995 at Tokyo Geijutsu Gekijo

主催：新交響楽団

●指揮

小泉 和裕

KOIZUMI Kazuhiro, conductor



1949年10月京都に生まれる。1969年東京芸術大学に入学、山田一雄氏に師事。

1970年第2回民音指揮者コンクール第1位入賞、旧日本フィルハーモニー交響楽団に指揮研究員として入団。1972年7月、新日本フィルハーモニー交響楽団創立に際し、指揮者として参加。同年10月ベルリンのホッホシュェーレに入学、ラーベンシュタイン教授にオペラ指揮法を師事した。1973年夏、ボストンのタングルウッド音楽祭に参加をする。

1973年11月には、第3回カラヤン国際指揮者コンクールに第1位入賞、その後ベルリン・フィルを指揮してベルリン・デビューを飾った。1975年1月、新日本フィルの音楽監督に就任。同年3月には、ベルリン・フィルの定期演奏会に出演し、好評を博した。その後、ウィーン、パリ、イタリア、西ドイツの各地をまわり、期待に応える。

1976年1月には、フランス国立放響でルービンシュタイン、ロストロポーヴィチと協演し、絶讃を博した。1979年12月に海外での活動をより充実させるために新日本フィルハーモニー交響楽団の音楽監督を辞任。

その後ベルリンに居をかまえ、ミュンヘン・フィル、バイエルン放響、フィルハーモニカ・フンガリ

カ、西ドイツ・フィル、その他、ヨーロッパ各地において精力的な指揮活動を行う。また、アメリカにおいても、1978年ラヴィニア音楽祭でシカゴ交響楽団を指揮し大成功を収め、早速1980年3月のシカゴ交響楽団定期に登場、注目を集めた。その他、ボストン、デトロイト、シンシナティ、トロント、モントリオールなどにも客演している。

1983/84年シーズンから1988/89年シーズンまでカナダのウィニペグ交響楽団の音楽監督、1986年より1989年まで東京都交響楽団の指揮者を務めた。ロンドンのロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団には1988年より定期的に招かれ、コンサートとレコーディングを行い、チャイコフスキーの交響曲第4、5、6番のディスクを完成させた。

1989年4月より九州交響楽団の首席指揮者に就任。1989/90年シーズンからは活動の中心を日本に移し、多くのオーケストラに招かれる一方、オペラにも力を注いでいる。

1993年4月より名古屋フィルハーモニー交響楽団客演常任指揮者。

1995年4月より東京都交響楽団首席指揮者。

新響とは142回演奏会以来で、今回が3度目の共演となる。

モーツァルト：交響曲第31番「パリ」ニ長調 K.297

Wolfgang Amadeus Mozart : Symphony No.31 in D major K.297

小倉 徹二（ヴァイオリン）

1777年9月、モーツァルトは母親とともにマンハイム―パリへの「就職旅行」に出発した。マンハイムは、ドイツにおける交響曲発展のメッカであり、当時は、ウィーンに匹敵する重要な音楽都市であった。そこで彼は、様々な音楽家にであって大きな影響をうけるが、特にその地のオーケストラは、ヨーロッパ最高の実力と性能を誇るものであり、強弱の鋭い対置とクレッシェンドの作り出す効果は彼を驚かせた。そして、次に訪れたパリにはさらに大規模なオーケストラがあり、コンセール・スピリチュエルという演奏組織と会場もあった。そこの支配人ジャン・ル・グロからモーツァルトに依頼されたのは、「10の管楽器をもつ」交響曲であり、その完成された交響曲は聖体祭の日に演奏され、大喝采を博した。

この3年半ぶりの交響曲では、マンハイムで学んだ管楽器の効果による色彩感、ダイナミックな表現法、パリで耳にした協奏交響曲の華麗な様式が巧みに取り入れられるなど、独自の構成法で統一されている。また「パリ」は、クラリネットが初めて採用された交響曲としても注目されるが、この完全な二管編成は後期の交響曲でも35番「ハフナー」以外には用いられていない。「パリ」交響曲は3楽章形式でできているが、第2楽章のアンダンテは転調が多く長すぎるという理由で、ル・グロから書き直しを命じられている。そのためアンダンテは2種類残っているが、一般的には、オリジナルなものが演奏される。本日の演奏も「オリジナル」の方である。また、モーツァルトは当時の聴衆の好みをも考慮にいたした曲作りをしている点にも驚かされる。

「僕は、コンセール・スピリチュエルの開演用に交響曲を一曲作らなければなりませんでした。聖体祭の祝日に、それは大喝采をもって演奏されました。

（中略）第1楽章の真ん中あたりに、気にいられるに違いないと分かっているパッセージがありました。——すべての聴衆がそれに心を奪われたのでした。——実際大変な大喝采でした（当時の聴衆は、曲の途中でも気にいっていると拍手をした）。——それがどんな効果をもたらすのか僕には分かっていたので、最後にそれをもう一度持ち出しました。アンダンテもまた受けましたが、特に最後のアレグロがそうでした。——当地では、最後のアレグロはすべて、第1楽章のように全部の楽器で同時に、またほとんどの場合ユニゾンで始まると聞いていたので、僕はそれをヴァイオリン2部だけの弱奏で始めてみました。——そのあと直ぐに強奏がきます。もちろん聴衆は僕の期待どおり、弱奏のところで、シッと鋭く叫びました。そして強奏を彼らが聴くのと、手を叩くのは同時でした。そこで僕は、嬉しくなってパレ・ロワイヤルに行って極上のアイスクリームを食べ、ロザリオにお祈りして宿にもどりました。」

「」内は、モーツァルトが父レオポルドにあてた、母の死を隠す有名な書簡（1778年7月9日付）の一部なのである。

初 演：1778年6月18日パリのコンセール・スピリチュエルにて。
楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

マーラー：交響曲第7番 ホ短調

Gustav MAHLER：Symphony No.7 in e minor

志村 努（トロンボーン）

この曲の解説の役が私に回ってきたのは、どうもテノール・ホルンの出番が第1楽章の中ほどで終わってしまいどうせ後は暇だろうから、ということらしい。ということならば、この場を使ってこの楽器の解説もさせていただこう。

そもそもマーラーがどのような楽器を想定して「テノール・ホルン」とスコアに指定したのが今ひとつはっきりしない。というのもこの系統の楽器は国によって、音楽のジャンルによって呼び方がまちまちだからである。新響のトレーナーである柴山先生に音楽事典で調べていただいたところによると、ドイツで言う「テノール・ホルン」はアメリカで言う「バリトン」のことだそうである。調はトロンボーンと同じ管の長さのB♭であり、実際マーラーのスコアの記譜もin B♭である。この楽器は吹奏楽でもっぱら使われており、管弦楽で使われることはめったに無い。イギリスの金管バンドで使われる「テノール・ホルン」は調がE♭で音色がずっと明るくマーラーが指定したのはこれではない。バリトンと同じ形、同じ管長で、管径の太いものが「ユーフォニアム」で、これはホルスト作曲の「惑星」で使われ、バリトンよりも太く**ぼうよう** 芒洋とした音がする。一方R.シュトラウスの「英雄の生涯」で使われる「テノール・チューバ」はこれまた同じ管長だが、音色的には完全に小型のチューバである。ということで、マーラーはユーフォニアムより硬く、テノール・チューバより線の細い音色のバリトンを使って、この曲の第1楽章のおどろおどろしい雰囲気を出したかったのではないかと思われる。

さて、この曲は1904年の夏に構想が練られ、1905年の夏にオーストリア南部、スロヴェニア（旧ユーゴ）、およびイタリアとの国境にも近いヴェルター湖畔マイアーニツヒにある別荘（正しくは別荘のそばの作曲小屋）で書き上げられた。当時マーラーはウィーン宮廷歌劇場（現在の国立歌劇場）の音楽監督であり、作曲家としてよりもむしろ指揮者として名声を得ていた。このような事情もあって、第5番から第7番までの歌の入らない器楽だけの3曲と第

8番の交響曲が、この場所で夏のオペラの休暇中に作曲されている。

この曲は通称「夜の音楽」と呼ばれているが、これは第2、第4楽章が作曲者によって「^{ナハトムジーク}Nachtmusik」と名付けられているからであり、曲全体が「夜の音楽」なのではない。「マーラー」と「夜」というキーワードからは、ともすると暗く不気味で激しい音楽を想像しがちであるが、実際はこの2つの楽章は共に穏やかで静かな音楽である。モーツァルトの「アイネ・クライネ・^{ナハトムジーク}」と同様「Nachtmusik」はセレナードのことであると考えたほうがよい。

曲全体は第3楽章のスケルツォを対称軸としたシンメトリーの構造を持っている。すなわち第2、第4楽章が「夜の音楽」、両端に派手な第1、第5楽章が置かれ、演奏時間も第3楽章が最短で、両端楽章にいくほど長くなっている。

第1楽章は最も長大で、マーラーらしさにあふれた楽章である。曲は不気味な伴奏とともにテノール・ホルンのソロでゆっくりしたテンポで始まる。いかにもマーラーらしい曲想の中で第1主題の断片が何度も現れる。約3分ほど経過したところでようやくホルン4本のユニゾンで第1主題がアレグロで提示される。しばらく景気の良い部分が続いた後、弦楽器中心の第2主題が静かにホルンを伴って始まり、しだいに管楽器のサポートを得て華麗に盛り上がるあたりは、マーラーのひとつの定番である（ここまで約5分）。弦の盛り上がりが高潮に達した後展開部が始まる。途中冒頭部分が一瞬現れた後、ヴィオラ3人とチェロ1人、ヴァイオリン2人のソリストたちにより演奏される第2主題の変形が美しい。少し後には信号ラッパ風のトランペットの合図があり、ここからしばらく静かな部分が続く。イングリッシュホルンを伴ったヴァイオリンのソロの後、2度目の信号ラッパがあり、さらにその後ハープのグリッサンドをきっかけに弦楽器中心の美しい旋律が始まる（またまた定番）。しだいに盛り上がり、行き、まるで映画音楽のクライマックスのノリで最

高潮に達するかと思われた瞬間、突然打ち切られて冒頭が再現される（ここまで約13分）。バス・トロンボーンとテノール・ホルンの掛け合いが終わると、ゆっくりしたテンポで弦楽器から盛り上がり、オーケストラ全体が最高潮に達したところで、ホルンが主題を再現する。この後はひたすら盛り上がる。途中1回静かになるところの半音階がR. シュトラウス風だと思うのは私だけだろうか。ついでに言えばその後に第6番の交響曲の第4楽章風の箇所が出てくる。最後はトランペットが大見栄をきってB(H)音まで登りつめて、駆け込むように楽章を終わる。

第2楽章はひとつ目の「夜の音楽」である。夜と言ってもウィーンのような都会の夜というよりは、オーストリアの山の村の夜というイメージだろうか。遠くの山にこだまするようなホルンのソロで始まり、だんだん楽器を増やして音量も大きくなったところで、ホルン3本ののどかな旋律が始まる。この旋律が次々に引き継がれていく。曲は終始のどかで明るい気分である。5分程経過したところで再びこだまするホルンが聞こえ、カウベル（放牧した牛の首に付けた鈴）の音も聞こえてきて、気分はますます田舎の雰囲気である。その後明るい気分、暗い気分が交互に現れ、時にはオーケストラ全体で非常に快活な雰囲気になる。13分ごろに3度目のホルンのこだまが断片的に聞こえる。最後は3連符の連続で静かに終わる。

第3楽章は「影のように」と書かれた3拍子のスケルツォである。これも一種の夜の音楽と言って良いかも知れない。弦楽器のささやくような3連符が不気味さをかもし出す部分、薄いオーケストレーションが寂しい気分させる部分、遊園地風のあっけらかんとしたウィンナワルツがかえって気味の悪い部分、などが交錯する。

第4楽章はふたつ目の「夜の音楽」である。短調かと思わせておいて実は長調になる冒頭のヴァイオリンソロに続いて、実にのどかでのにびりした音楽が始まる。こんなにリラックスしてしまっていて良いのだろうかというほど穏やかである。この楽章ではマ

ンドリンとギターが使用される。マンドリンのつま弾きが入ると、窓から月明かりの入る田舎の家の夜といった風情である。オーケストレーションは終始薄く、室内乐的である。この穏やかな楽章にも開始から11分すぎたところに1回盛り上がり訪れる。



客席をにらむマーラー

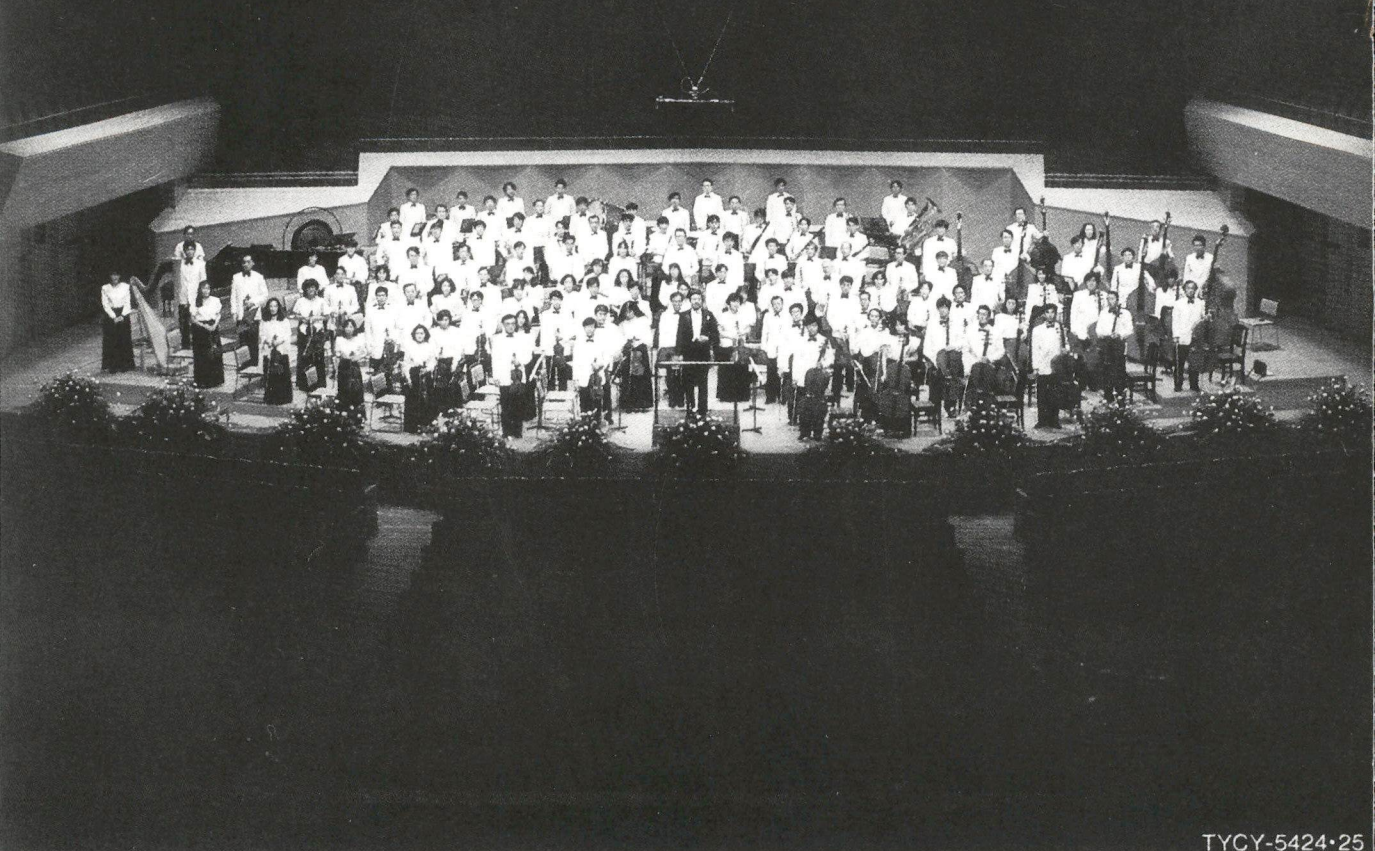
さて第5楽章はロンドであるが、出だしはそれまでの楽章からするといかにも唐突である。いきなりティンパニがドンドコやりだしたかと思うと、ホルンが狂ったようにトリルを始める。かと思う間もなく木管が総ベルアップでひやらひやらやり出す始末。するとトランペットが唐突に転調してめっちゃめっちゃに明るいファンファーレ風の旋律を高らかに吹き鳴らすという次第である。この楽章のロンド主題はこのトランペットの派手な旋律と同時に一見裏の旋律のようにしてホルンによって提示される。実はこの主題は第1楽章の第1主題の上下裏返しである。シンメトリーはここにも現れている。この後はこの主題がいくつかの副主題と共にさまざまに姿を変えながら繰り返し繰り返し登場する。繰り返しが進むうちに最初の唐突な驚きもしだいに薄れて、マーラーが技法の限りを尽くして繰り広げるオーケストラの響きに身をまかせて、しだいに気分が高揚してくる。交響曲第8番の前触れのようなところもでてくる。ところどころ頭を冷やす静かな部分が現れるが、クライマックスに向けてどんどん興奮は高まり、後半は鐘の乱れ打ちも登場する。最後はホルンが第1楽章の第1主題を長調に変えて高らかに奏し、カウベルまで総動員で曲は最高潮に達し、そのまますぐ終りとなる。

初演：1908年9月18日ブラハにて、マーラー自身の指揮による。
楽器編成：ピッコロ、フルート4（4番および2番はピッコロ持替え）、オーボエ3、イングリッシュホルン、変ホ調のクラリネット、イ調のクラリネットおよび変ロ調のクラリネット各3、バス・クラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、変ロ調のテノール・ホルン、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、グロッケンシュピール、カウ・ベル、ハーブ2、ギター、マンドリン、弦楽5部

新交響楽団

伊福部 昭

傘寿記念シリーズ



TYCY-5424・25



新交響楽団

伊福部 昭 傘寿記念シリーズ

新交響楽団が、伊福部 昭の傘寿(満80才のお祝い)を記念して彼の6つの作品を、1993年から1994年にかけて定期演奏会で集中的に取り上げた。このCDはそのライブを収録した記念盤です。特に新交響楽団がベルリンに海外演奏旅行に出かけ、その時演奏された「ラウダ・コンチェルタータ」は、現地新聞でも絶賛された名演奏である。

絶賛発売中!

TYCY-5424~5 2枚組 ¥5,000 (税込)

全国有名レコード店でお買い求め下さい。

〈収録曲〉

- ① オーケストラとマリムバの為の「ラウダ・コンチェルタータ」
マリムバ: 安倍圭子 指揮: 石井真木 '93. 9. 7 ベルリンフィルハーモニーホール
 - ② 日本狂詩曲
指揮: 小泉和裕 '94. 1. 29 東京芸術劇場
 - ③ 交響譚詩
指揮: 原田幸一郎 '94. 4. 23 東京芸術劇場
 - ④ 管弦楽のための「日本組曲」
指揮: 小林研一郎 '94. 7. 23 東京文化会館
 - ⑤ シンフォニア・タブカーラ(改訂版)
指揮: 原田幸一郎 '94. 10. 10 東京芸術劇場
 - ⑥ SF交響ファンタジー第一番
指揮: 原田幸一郎 '94. 10. 10 東京芸術劇場
- 作曲: 伊福部 昭 演奏: 新交響楽団

ユーメックス

YOUNEX

聴いてください、新響のマーラー

吉川 具美 (チェロ)

実は、私は特にマーラーのファンではない。何をかくそう作品をあまり知らないのである。きょう演奏する第7番も、1回目の練習の数日前にあわてて図書館でCDを借りて、初めて聴いたという始末。何せ交響曲だけでも11曲もあって、ほとんどが1時間はかかる長さだし、ふだん、自分の家でマーラーのCDを聴いたりすることはまずないので、弾いたことがない曲はよく知らないのだ。

ただし、演奏会の券を買うときは別である。一度も聴いたことがないマーラーの交響曲のみのプログラムの演奏会を聴きにいったこともあるが、よく知っている曲を演奏会で楽しむときは別の、忘れがたい充ち足りた思いを味わったことが多い。実演を聴く限りにおいては、マーラーは、なぜか初めて聴くときから質の高い音楽体験が楽しめるのだ。マーラーの音楽は、ききてに対して、集中して聴くことを余儀なくさせる強烈な力があり、演奏会で実演を聴くという状況こそがふさわしいのかもしれない。

演奏する側にまわっても、マーラーに取り組むシーズンの練習はとくに充実している、と思う団員は私だけではないと思う。何とんでも編成が大きくて派手にみんなで思い切り大きな音を出しまくるから、スカッとする……いえいえ、新響はそんな暴力的な演奏はしない(はず)。マーラーの音楽は、確かに派手で激しくて、外にむかって情熱をほとばしらせるような強烈な部分も多いけれど、第7番の第1楽章の冒頭のように重く暗く沈みこむような部分もあれば、第2楽章の静かな森のおだやかなぬくもりに身をまかせるような部分もあり、と思うと何となくイライラする実りのない会議に出ているときのような気持ちになる部分とか、恋にこがれるようなあこがれとか、天国から差し込む澄んだ光がそのまま音楽になったようなところとか、……まあ、あとご自由にお聴きください、というくらいさまざまな要素がある。しかもこれらが突然目まぐるしく入れかわり、あるときは思い直したように立ち止まり、どの楽章も決して単一の気分では終わらない。マーラーという人自身が、そもそも激しい気分屋だった

うえに、何かと振幅が大きく深く苦悩せざるを得ない人生を送ったことが、そのまま音楽になっているようにみえる。マーラーを演奏するとすると、この気分の激しい動きについていく、いやそれを先

取りして音楽を組み立てていかななくてはならない難しさがある。

そもそもマーラーの交響曲は、編成が大きいことに加えて、多くの特殊な楽器と、曲によっては独唱者や合唱団まで必要とし、技術的にも困難である。それでも、新響はよくマーラーをとりあげる。以前、故山田一雄先生のもと、交響曲の全曲演奏に取り組み始めた当初は、どちらかといえばまだ、「アマチュアがマーラーに挑戦する」という色彩が強かったのではと思う。しかし、「そこに山があるからとにかく登ってみる」ように、次々とマーラーの音楽の巨大な山脈に挑み続け、十数年たってなんとか全交響曲という山を登りつくすうちにいつか、新響の眼前には、マーラーに対する新たな音楽的視野が開けたように思われる。

新響の団員の平日は、満員電車でゆられて通勤し、会社で得意先に頭を下げる会社員だったり、ヤル気のない生徒をなんとかしなくてはならない教師だったり、資金繰りに奔走する個人経営者だったり、際限がない家事やら育児やらに追われる主婦だったり、まあそれぞれが実にリアルな都市生活を送っている。そのこみいった世の中では、どんな暮らしであっても、マーラーのそれとは比較にならないにしろ、それなりに深刻な苦悩を抱えていたりする。そして土曜日になると、皆いろいろな事情を振り切り、時間を都合し、楽器を抱えて練習場にたどりつき、揃ってマーラーを練習する。この、何もかも忘れてマーラーを練習する3時間に、天才作曲家の苦悩の気ま



指揮するマーラー

ぐれを音にしていく作業を通じて、団員ひとりひとりが毎日の生活を抱えこんだ感情なり思考なりが（おそらくは無意識のうちに）昇華され渾然一体となって、新響のマーラーがかたちづくられる。

いまや、学生のオーケストラでもよくとりあげられ、コマーシャルでもよく耳にするほどに受け入れ

られているマーラー。新響では、故山田先生の交響曲全曲演奏の積み重ねで切り開いた新たな地平に向かって、さらに小泉和裕先生（第136回＝5番、今回）や小林研一郎先生（第144回＝復活）とのマーラーに取り組み続ける。私たちの、生活者としての、アマチュアとしての、マーラー。聴いてください。

かつて、彼の時代は

上原 誠（打楽器）

「途中で木管が一斉に楽器を高くあげてたけど、あれは何か意味があるのかな？ 音が変わるわけでもないだろうに。」いつだったろうかマーラーの演奏会の帰り道、こんな声を耳にした私は思わず「あれは楽譜に指定してあるんです。」と話しかけてしまった。実際、マーラーの楽譜にはイタリア語による通常の指示の他に、驚くほど様々なことがドイツ語で書かれている。“せきたてるように” “急ぐな”（時には！がついて）“目立て” “消え行くように” “嘆き悲しんで” 等々、そしてさらに、“キイキイ鳴くように” “ギラギラ眩しく” “気弱そうに” “光線を放つ” といった分かるような分からないようなものも含め、まだまだしつこいほど出てくる指示はマーラーの性格の現れであり、それが様々な経験により助長されたものと言うことができる。

演奏解釈や作曲の賞を幾度か得て、優秀な成績でヴィーン楽友協会音楽院を卒業したマーラーが生活のために指揮やピアノ教師をしながら作曲を続け、『嘆きの歌』をベートーヴェン（作曲）賞審議会に提出したのは1881年（あるいは80年）だった。そのころのヨーロッパの音楽界ではヴァーグナーとブラームスが対立関係にあり、それぞれの信奉者の論争は過熱気味のありさまだった。ほとんどの音楽院の仲間と同様、熱烈なワグネリアンだったマーラーの作品は、この審議会を主宰するブラームスとその一派の審査員たちの激しい拒否反応にあい、門前払

い同然の扱いを受けてしまった。そのため、彼はヴィーンで作曲家として成功するという第一の目標が当面は難しいと考え、とりあえず指揮者としての活動に本腰を入れ始めた。日本でいえば、温泉地のドサ回り一座を皮切りに音楽界の頂点を極めようという野望を秘めて、食欲に次々とより高い地位を漁り、破竹の勢いで出世を遂げていった。たしかにマー



第7交響曲作曲の頃。別荘のマイアーニッヒにて娘のマリア・アンナと。彼女は2年後に5歳で急逝する。

ラーには行く先々でデビューしたその日から聴衆を完全にとりこにしてしまうだけの才能があり、加えて、より高い地位を得て自分の権限が広がるたびに、さらに高い理想を追及しようとする強い執念を持ちあわせていた。そして1897年、マーラーは念願のヴィーンの、しかも宮廷歌劇場の音楽監督にまで登りつめてしまった。

このヨーロッパ音楽の最高の地位についた彼はドラマの復活に最も力を入れ、洗練された娯楽を提供する上流社会の社交場となっていた歌劇場に、芸術至上主義とも言うべき改革を断固として押し進めた。芸術については決して妥協しないと公言し、劇的能力を持たない歌手は練習中であろうと容赦なく解約され、指揮、演出はもちろん、聴衆に対してもアリアの後の拍手を禁止するなど、徹底的に自分の意思を主張した。彼が存在した10年の間、歌劇場の管弦楽団員の約半分の60人が更迭され、またある時のリハーサルでは業を煮やしたマーラーが、うろたえている自分より大きな歌手を抱えあげて望む場所に移したというエピソードすら残されている。

並外れた才能の持主がこれほどまでに力を入れた結果、ヴィーンの歌劇場は新時代を迎えたと絶賛され、熱狂する聴衆は日に日に膨れ上がっていった。しかし一方で、あまりの厳格なやり方に対する反感や異例の出世に対する嫉妬がいよいよ強まり、その根底にはマーラーがユダヤ人であったが故の嫌悪感があった。「私には三重の意味で故郷が無い。オー

ストリア人の中ではボヘミア人として、ドイツ人の中ではオーストリア人として、世界中ではユダヤ人として」としばしば口にするほど孤独感にさいなまれ、ますます激しくなる反感と戦いながら文字通り骨身をすりへらすほどの激務をこなしていた彼を解放し、^{よみがえ}蘇らせたのは夏のシーズンオフの間の作曲活動だった。湖畔の別荘の裏山の美しい自然の中に建つ小さな小屋に閉じ籠もり、誰に邪魔されることなく作曲に没頭した。彼はヴィーンの歌劇場で得たもの、効果的な楽器を使い分け、ドラマに説得力を与えるための細かなニュアンスと全体を見据えた細部の構成、そして更に自らのアイデンティティーから彼がそれまで生きてきた中で体験したあらゆる喜怒哀楽までも譜面の中に塗り込んでいった。まぎれもない自分の音楽に託したものが後の世にまで正確に伝わるためには、前述のようなこと細かな指示が必要だったのだろう。

マーラーの音楽には、どのような状況に陥ろうと自分の理想を追及してやまなかった強靱な、しかし生身の人間の魂の叫びが聞こえる。神に対し、自然に対し、^{あこが}憧れの的ヴィーンに対し、故郷に対し、人類に対し、周りの人や過ぎ去った人に対し、ある時は哀願し、ある時は感謝し、そして時にはニヒルなまなざしを投げかけながらも、いつか必ず訪れることを確信していた勝利を聞きとることができる。彼が残した言葉「やがて私の時代が来る」の何倍もの説得力をもって。

団員募集！

新交響楽団は会社員、教員、学生、主婦などなど、さまざまな職業・年齢にわたる団員で自主運営されているアマチュアオーケストラです。音楽監督の故芥川也寸志氏が長年にわたって主張し続けてきた「音楽はみんなのもの」を実践し、常に新しい視点を持って活動していくために、あなたの力が必要です。何はともあれ、ぜひ一

度練習をご覧ください。いつでも歓迎です。団費：入団費4,000円、団費月額4,000円。練習は毎週土曜午後6～9時、労音十条会館他にて。

なお、新響では入団に際してオーディションがあります。詳細は下記斎藤までお問い合わせ下さい。

・連絡先……………斎藤茂樹 ☎043(276)1422

新響は7月に2回の演奏会を開きます！

新響は7月16日(日)に第148回、7月30日(日)に第149回の演奏会を行います。148回は「映画生誕100年」と銘打って映像つき、149回はワーグナーとブルックナーの第8交響曲というまったく対照的なプログラムです。

●第148回演奏会——映画生誕100年

今年は映画が誕生して100年目という記念すべき年にあたります。毎年3月末にロサンゼルスで開かれる「アカデミー賞」の受賞式でも、これを意識してか例年より華やいだものになっていたようです。今年は「フォレストガンプ」が6部門で受賞して話題をさらいました。

さて、はじめに映画生誕100年と書きましたが、100年前の映画とは一体どのようなものだったのでしょうか。モノクロの無声映画ということは容易に想像がつかますが、まったく音のない映画というのも実際に間の抜けたものに違いありません。そこで、ナレーター（日本流に言えば弁士）が話を進行させ、小編成のバンドが映画の情景を音楽によってふちどりしていくことが必要になってきます。そこで映画音楽の出番です。

初めて映画のために音楽を付けた人。その中にはサンサーンスやサティのような大作曲家もいます。彼らは映像表現における、音楽の可能性の大きさを誰よりも早く察知していたのでしょうか。

そして日本の映画。新響は昨年の2月に埼玉県松伏町で芥川也寸志の映画音楽を中心としたコンサートを開きました。このコンサートは、会場を暗くして前方のスクリーンに映画の一場面を写し出すもので、聴衆の反応もよく、団員からも是非東京でやりたい、という声があがりました。

このときのコンサート、企画は秋山邦晴氏で、今回も「映画生誕100年」という趣旨で企画から参加していただいています。指揮もそのときと同じ小松一彦氏です。この次の演奏会では映画の一部を上映し、それを御覧になりながら、秋山氏に映画や音楽についてのおはなしをしていただくことにしています。

それではお楽しみに！

●第149回演奏会

——飯守氏でブルックナーの第8交響曲を

飯守泰次郎氏は'92年4月以来2度目の共演です。前回はワーグナーの序曲（ローエン格林、タンホイザー）と、ブルックナーの「ロマンティック」でした。このときの共演を通じて私達は、飯守氏のヨーロッパでの長い経験に裏打ちされた高い音楽性に魅せられ、暖かで気さくな人柄に虜にされてしまったのです。そこで、今度はブルックナーの畢生の大作である第8交響曲を取り上げることにしました。乞御期待！

第148回演奏会・演奏曲目

作 品 名	封切年	作 曲 者	コ メ ン ト
ギーズ公の暗殺	1908	サン＝サーンス	それまでの娯楽用映画から、芸術作品としての映画への第1作。
雨	1929	アイスラー	アムステルダム街の街が雨によって変貌していく。印象主義的な作品。
幕 間	1924	サティ	サティがシャンゼリゼのビルの屋上からエッフェル塔へ大砲をぶっ放す。
空想部落	1939	深井 史郎	東宝娯楽映画の第1作。管楽器と多くの打楽器という特異な編成の作品。
ホゼイ・トレス	1958	武満 徹	黒人のミドル級ボクサー、ホゼイ・トレスの訓練風景と休息のシーン。
煙突の見える場所	1953	芥川 也寸志	50年代芥川映画音楽の代表作の1つ。兄の芥川比呂志が出演。
猫と正造と二人のをんな	1956	芥川 也寸志	原作は谷崎潤一郎。出演者に森繁久弥。映画としても佳作。
八甲田山	1977	芥川 也寸志	明治時代の雪中行軍遭難に基づく映画。邦画興行収入の新記録を樹立。
日 蓮	1979	芥川 也寸志	日蓮波瀾の生涯。身延山久遠寺、池上本門寺の協力により制作。

RICOH



ここで
チカラを
出したい時に。

パソコン
とつながる
複写機

高性能&コンパクトの
一台三役。

IMAGIO

MF150 Model65

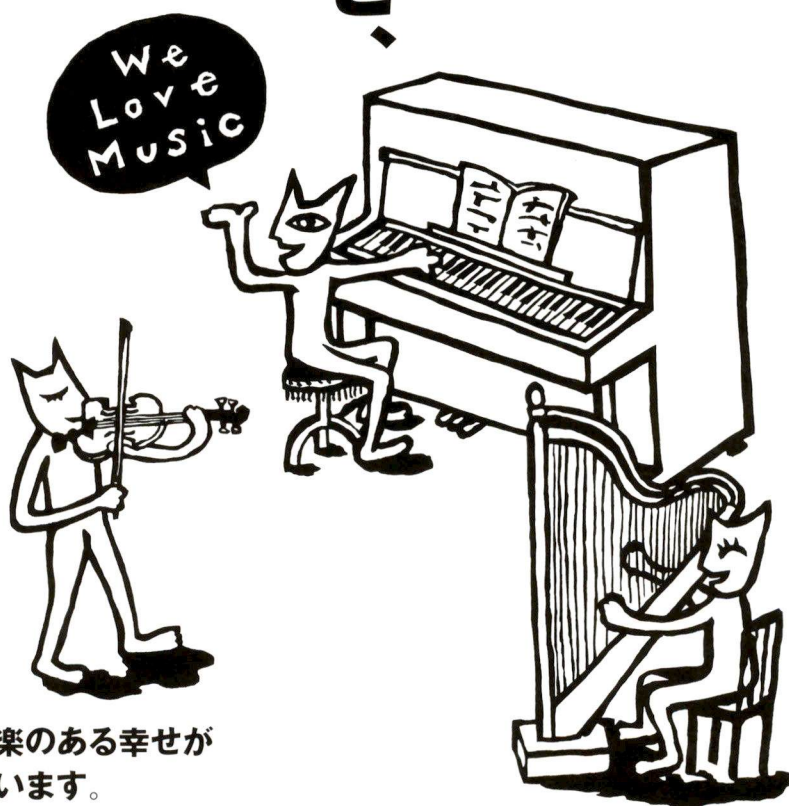
これ一台でコピー、ファクス、
さらにパソコンとつなげばプリンターにも。
おまけにデスクまわりに置けるコンパクトボディ。
さらにはデジタルならではの高画質と高速印刷。
まさにオフィスでチカラを発揮する一台です。



急いで
データを
出したい時に。

ビジネスに元気を。パソコンにイマジオを。

音楽のある幸せ、
届けます。



この先もずっと、音楽のある幸せが
続いてほしい、と思います。
誰もが手軽に、音楽を楽しめるように。
つくる人も安心して創作活動に
専念できるように。
JASRACは著作権の管理を通して、
音楽の未来を守っています。

JASRAC

日本音楽著作権協会

〒105 東京都港区西新橋1-7-13 ☎(03)3502-6551